



ぼっち^は回復役^に 打^{って}出^{まし}た

異世界を乱す暗黒ヒーロー

空 水城

Mizuki Sora

主な登場人物

MAIN CHARACTER

アリス

優人たちを異世界に召喚した
謎多きお姫様。

遠藤

クラスのヤンチャ
男子のリーダー格。
優人を目の敵にしている。

橘 愛加梨

学校一の美少女だが、
実は隠れオタク。
優人に対しては
「趣味」の話をする。

ノア

異常な魔法属性を持っている
せいで異端視されている、
ぼっちの魔法使い。

白鳥 香純

クラス委員長。
正義感が強くて仕切り屋。

杖本 優人

クラスに居場所がないぼっちの少年。
敵にダメージを与える特殊な
回復魔法の使い手。

ミヤ

冒険者ギルドの受付嬢。
いつも眠そうだが、仕事はしっかり。

プロローグ

俺の名前は杖本優人^{つえもとゆうと}。十七歳の高校二年生。

ただいま学校で、クラスの皆が大好きな朝のホームルームに参加している。

「はい、今日は五時間目に修学旅行のグループ決めやるから、そのつもりでなあ」

我らが2年C組の担任を務める女教師、小林先生^{こばやし}が気怠^{けだる}そうに宣言する。

たちまち、教室は興奮した生徒達の狂騒^{きやうそう}で満たされた。

「おぉー!! 修学旅行きたあー!!」

「俺とグループ組みたい奴、挙手ー!!」

「誰もいねえよ、バーカ!」

おバカ学校の微笑^{ほほえ}ましい朝の教室風景である。そんなヤンチャ男子たちのやり取りを見て、クラス奴らはどっと笑う。心なしか、小林先生も微笑んでいるように見える。

一方俺はというと、皆とは正反対に顔をしかめ、机に頬杖をついてそっぽを向いていた。

——動物園のサルか、こいつら? いや、むしろ池にいる鯉^{こい}だな。修学旅行という餌^{えさ}を撒かれて、ピチピチ暴れる鯉^{こい}のようだ。

俺が話の輪に加わらず、こうして一人心中で毒づいている理由は、クラスで居場所がない ぼっ

ち”だからである。

俺がぼっちになった理由は腐るほどあるが、その一番は、俺が中途半端なオタクだからだろう。マンガやゲーム、ラノベを少し嗜む程度だが、教室で堂々とアイドル系の音ゲーをやったりアニメを見たりする完全なオタクにはなりきれない。

だからと言って、四六時中騒いでいるヤンチャなグループにも入れない。「騒いじゃう俺がいいー」とか、「ツッコミ入れる俺おもしろー」とか、そんなことを考えている有象無象が子供っぽく思えてしまうから。

だから俺は、ぼっちでいいやと思った。

なんで今時の高校生って、フツーな人たちがいないんだろ？

幸い、俺は完璧に一人ぼっちというわけではない。話せる相手が一人だけいる。

俺にはそれだけで十分だった。

ホームルームが終わり、ロッカーに授業の教材を取りに行こうと皆が慌ただしく動き出す。そんな中、俺の制服の袖がちよいちよい、と遠慮がちに引っ張られているのに気がついた。

「ねえ、ねえ、杖本君」

おや？ 天使かな？ そう勘違いするのも大袈裟ではないほど綺麗な声。

振り向くと、そこにはニコツと満面の笑みを浮かべる美少女がいた。

肩までかかる茶色の髪に、くりつとした大きな瞳が特徴の幼さが残る顔。肌は汚れを知らないよ

うに白く、きめ細かい。

なんだ、本当に天使だったか——じゃなくて、学校一可愛いと噂されている美少女で、クラスメイトの橘愛加梨さんである。

「ど、どうしたの？」

俺は引きつった笑みを浮かべながらも、辛うじて平静を装って返す。

うわあ、今の俺、相当気持ち悪い顔してるんだろなあ。橘さんの姿を見るだけでもままならなのに、間近で会話するのはハンパなく緊張するのだ。俺の顔面偏差値が四十くらいなのは何も関係がない。

——元からブサイクなだけだろって思った奴……勘弁してください。

「うーん、杖本君、一人だけ元気ないなって思ってる」

小柄な橘さんは上目遣いで俺の顔を覗き込む。うう、可愛いなあ。

この美少女こそが、俺の唯一の話し相手である。

「そ、そんなことないよ。いつも通り」

ぼっちの上に大してかっこよくもない俺が、なぜこんな美少女とお近づきになれたのかと言うと、それは俺が、ひょんなことから橘さんの秘密を知ってしまったからだ。彼女と仲の良い友達はおろか、クラスの誰も知らない秘密を、俺だけが。

彼女は去り際に、皆に気づかれないようにこう言い残した。

「今日、またお昼に図書室でお話ししようね。昨日発売された、ラノベの話」

そう、彼女は……隠れオタクだったのだ！

二カ月前の昼休み、俺はいつものように図書室でラノベを読んでいた。

休み時間だというのに、図書室には俺以外誰もいなかった。それが普段通りの光景だ。

そこに、橘さんが現れた。

周りの視線を気にするように、こっそり図書室に入ってくると、彼女は上着の内側に隠していた本を取り出して、立ったまま読み始めた。まるで本の続きが気になって、居ても立ってもいられない、という感じで。

食い入るように本に目を落としながら、彼女は俺の正面の席に座った。

どうやら本に集中しすぎて、俺がいることに気がついていないみたいだ。いや、ただ単に俺の影が薄いだけかもしれないけど。

そのまましばらく、沈黙が続く。俺にとっては緊張の時間だ。

十分ほどすると、切りのいいところまで進んだのか、彼女は本に葉を挟んで机の上に置いた。

そこで初めて、彼女は俺の存在に気がついた。

そして、真正面に座っていた俺には、彼女の読んでいる本がバッチリ確認できた。若者向け娯楽小説のジャンルで、オタク文化の一端を担う——ライトノベルだったのだ。

彼女は、購入したばかりのラノベの続きが気になるあまり、友達やクラスメイトにも内緒で教室を抜け出して、ひとけの少ない図書室に來たらしい。

あの時の橘さんの真つ赤な顔は今でも忘れない。

そんなにラノベを読んでいることを知られたくないなら、まず図書室に誰かいなかちゃんと確認するべきだし、本にカバーでも掛ければいいのになあ、とも思ったが、そういうドジな部分もまた可愛いので、良しとしておこう。

学校でただ一人、彼女の趣味を知った俺は、オタクトークの相手にされてしまうのだった。

これが、超絶美少女で隠れオタクの橘さんとお近づきになれたきっかけである。

ようやくお昼休み。

授業中もヤンチャな男子たちが修学旅行の話で大盛り上がりしていてウザかったが、このあと訪れるハッピータイムのことを思っ、俺は早退せずに耐えていた。

ハッピータイムというのは、もちろん橘さんとのオタクトークである。

俺はコンビニで買ったパンを早々に平らげ、図書室に向かった。

今日も図書室には誰もいない。

学生の読書離れは深刻だなあ、なんて考えながら、俺はいつも座っている端っこの席につく。でもまあ、お蔭で周りを気にせず橘さんとお話できるわけだし、好都合だ。

俺はこのお昼休みのためだけに学校に來ていると言ってもいい。

相当気持ち悪い思考だが、他の奴らだって似たようなものだ。

部活のためだけに学校に来ている奴、友達とバカ騒ぎするためだけに学校に来ている奴、好きな子とお話するためだけに学校に来ている奴、どこが違うというのだろうか？

そんなことを考えていると、カラッと音を立てて図書室のドアが開かれた。

目を向けると、そこには満面の笑みを浮かべた橘さん。

さあ始まりますよ、俺のハッピータイム。

「そういえばさあ、この前貸したアニメのDVD、もう見た？」

真向かいの席に座った橘さんが、笑顔で俺に問いかけた。

「ああ、見た見た。面白かったよ」

「ホント!?　じゃあ今度原作持ってきてあげようか？」

「えっ?　う、うん。是非貸してください!」

薄暗い図書室に、二人っきりのオタクトークが響く。

やばい、超幸せ。今まで友達はおろか、知人すらできなかった俺の前に、天使が舞い降りた。

これ一生涯の運を使い果たしてるんじゃないの？

このままラブコメ路線に突入して、俺は橘さんと幸せなゴールへと辿り着けるのか!?

……まあ、そんなの無理って分かってるんですけどね。愚かな妄想でした。

「杖本君はさあ、クラスの人と仲良くしないの？」

「えっ?」

突然話題が変わり、俺は驚いて橘さんの顔を見た。心なしか、悲しそうな表情を浮かべている。

「いや、杖本君で、ちゃんと話せば面白いし、クラスの人たちと仲良くできるんじゃないかなって」

「ああ、そういうこと……。ん、俺には無理かなあ」

「……どうして?」

「遠藤とか山下とか、騒ぎまくる連中と仲良くできる気がしないんだよなあ。それに、いつも教室の隅っこで固まってる中野たちとも、難しいと思う」

橘さんは下を向いて黙り込んでしまった。

そう、今さら俺はクラスの奴らと仲良くなてできない。

クラス内で確立されたグループに、後からよそ者が入り込むのはかなり難しいのだ。リア充の遠藤たちが、中野たちのオタクグループに入ることが不可能なように、中途半端オタクの俺は、そのどちらのグループにも入ることができない。

それに、高校二年の後半に入った今では、もう手遅れだ。

「でもさ……話し相手が教室で寂しそうにしてるのを見るのは、結構辛いんだよ?」

「寂しそう、って……俺が?」

「うん……」

俺、教室だとそんな感じに見えるのか。

実際は全然寂しいと思っていないんだが、無意識にそういう顔をしているのかもしれない。でも、橘さんの意見はごもっともだ。こうしていつも話している相手が、クラスで除け者にされていたら、穏やかな気持ちではられないだろう。

俺はぼっちのままでも大丈夫だけど、橘さんにそんな悲しい顔してほしくないなあ。照れ隠しに頬をポリポリ掻きながら、俺は口を開いた。

「ま、まあ、修学旅行もあるし、その時にでも仲良くしてみようかなあ……なんて」すると橘さんは、パッと笑顔を咲かせた。

「うん！ それがいいよ！ 修学旅行ならきつと友達できるよ！」

「う、うん。まあ頑張ってみるよ」
正直あんまり気乗りはしないけど、橘さんのためなら仕方ないな。
あの騒がしい連中とも、少しは仲良くしようと思う。橘さんのために。

そんなこんなありまして、待望の五時間目。

教室は耳を塞ぎたくなるほどの喧騒に包まれていた。

「せんせー！ お風呂は混浴ですかー!？」

「夜に部屋抜け出して女子のところにいくのはありですかー!？」

「向こうでナンパしてもいいですかー!？」

やばい、超うるさい。やっぱりこいつらと仲良くするなんて無理。絶対無理。勘弁してくれよ。

俺の心は早くも折れかけていた。

「ナンパも夜這いも全部ダメだ！ まったく、お前らはあ」

そう呆れた調子で口にする小林先生だが、口元は微笑んでいた。

自分のクラスが元氣いっぱい嬉しいうのだろう。

クラスのバカ共に負けじと、委員長の白鳥さんが声を張り上げた。

「騒いでないで、さっさとグループ決め始めなさい！」

『おおー!!』

おおー、うるさいうるさい。俺はついに耳を塞いでそっぽを向いてしまった。

「私が戻ってくるまでに決めておくんだぞお」

小林先生はそう言い残して教室を出ていった。

これで完全に修学旅行のグループ決めは生徒たちに一任——いや、丸投げされた形だ。

生徒諸君らは各々に動き出し、仲の良い者同士で固まっていく。早くもグループが決まった奴らが、黒板に名前を書き始めていた。

その光景を教室の隅の席で眺めている俺。

ここで動かずに、どこかのグループがお情けで誘ってくれるのを待つのが、いつもの俺だった。

だけど、今は違う。俺は、ある決意を胸に、自ら動く。橘さんの悲しい顔をもう見ないために。

人生で初めて、「仲間にくれて」を絶対に成功させてやるんだ。

いくぞ。いつてやるぞ。自信を持って、杖本優人。お前ならできる。

よし、3……2……1……0！

俺は勢いよく席を立ち、黒板周辺に集まっている奴らの方へ歩み寄った。

初めて友達づくりのために踏み出した一歩。

俺はこの一歩が、一人ぼっちの自分から抜け出すための大きな前進になると思っていた。

……だけど、そうはならなかった。

突如、予想だにしていなかった出来事が起こった。

教室の床が、眩く光り出したのだ。

占いなどでよく見る、魔法陣のようなものが教室の床に出現して、真っ白な光を放っていた。

えっ!?　なんだ、これ？

クラスの皆もこの現象に驚き、混乱しているようだったが、誰も何もできないまま、事態は進行していく。白い光は床のみでなく教室全体を覆い、視界を真っ白に塗りつぶす。

こうして、俺たちは教室から姿を消した。

異世界ぼっち誕生

1

寝起きに直射日光を浴びたかのような眩しさを堪えて、なんとか目を開けると、そこは一面、白い大理石の壁で覆われた大きな建物の中だった。

左右に木でできた横長の椅子が整然と並び、真ん中は細長い通路になっている。

まるで教会。そう思わせる内装の建物だ。

この場にいるのは俺だけではないようだ。周囲では教室にいたはずのクラスの連中が各々に不安や驚きの言葉を口にしてどよめいていた。

「えっ？　何が起こったんだ？」

「ここ、どこ？　怖い……」

ついさっきまで教室にいたはずなのに、いつの間にかクラス全員揃ってこんな場所にいる。

考えられる原因は、床に現れた謎の魔法陣。そこから放たれた光にクラス全員が包まれて、ここに来てしまった。

だが、一体どんな原理でこんなことが起きたというのだろうか。

「お、おい。あれ、誰だよ？」

クラスの男子が指差す方向に、皆の視線が集まった。

そこには、俺たちのクラスには絶対いなかっただろう人間がいた。

学生達は皆共通の制服姿だったが、その中に純白のドレスに身を包んだ女性が一人。染めたとはいえないようなさらさらの金色の長髪に、ドレスに負けないくらいに真っ白な肌。

お姫様と言われたら迷わず信じてしまうような、そんな美人さんだ。

その人物は床に膝をついて祈るような姿勢でじっと構えていたが、俺たちの視線に気づいたのか、ゆっくりと立ち上がった。

「突然驚かせてしまつて申し訳ございません」

透き通る綺麗な声が、教会のような建物内に響き渡った。

「あなたたちをここに招いたのはこの私です。王城都市の第一王女、アリスと申します」

アリスと名乗った美人さんは、感情を表に出さずに淡々と自己紹介をした。ていうか、ホントにお姫様だった。

どう反応すべきか分からずにクラスの連中が黙り込む中、一番リーダーシップのある委員長の白鳥さんが口火を切った。

「アリス、さん……でいいのかしら？ 私たちをここに招いたというのはどういう意味？」

白鳥さんは黒髪をポニーテールにしたメガネ美人で、正義感が強い仕切り屋という委員長属性でんこ盛りのスーパーヒーローマンである。

「分かりやすく言い直しましょう。この世界を救っていただくために、あなたたちを召喚したのです。勇者として」

アリスさんが相変わらずの無表情で答えた。さすがの白鳥さんもこれには口をぽかんと開けて黙るしかなかった。

だが、そんな中でも混乱していない人物がただ一人だけいた。

「ゆ、勇者？ 召喚？ あれ、これってもしかして……」

わくわくした様子で一人呟くのは、優しくて可愛くて隠れオタクの、あの橘さんだった。

彼女は興奮で緩んだ頬を隠しながら、隅っこにいる俺のもとにやってきた。

「杖本君、杖本君。これってもしかして異世界召喚って奴じゃないの。そうじゃないの。それっぽいよね。やばくない？」

おいおい、ハンパねえな橘さん。この状況でなんでそんなにテンション上げちゃってるの？ どれだけ肝っ玉据わってるんだよ。

いつもなら真っ先にぎゃーぎゃー喚く遠藤や山下たちも黙りこくっているし、オタクの中野たちはパニックって訳の分からない独り言を漏らしている。

白鳥さんはなんとか混乱から抜け出し、アリスさんに問い返した。

「今“この世界”って言ったわよね。それはつまり……ここは日本じゃないの？」

さも当然のように、アリスさんは言う。

「その通りです。ここは“ラインヴィーゼ”という名の世界。あなたたちの住んでいた世界とは全

く別の……そうですね、剣と魔法の世界と言えば皆さんにも分かりやすいでしょうか」

普通なら頭がおかしいんじゃないかと思われても仕方のないようなことを、さも当然のように、アリスさんは言う。

「剣と……魔法!?」

状況を呑み込めない白鳥さんが固まる一方で、俺の隣にいる橘さんのボルテージは最高潮に達した。

「き、き、き……来たあああ。剣と魔法。そして異世界。これは確定でしょー」

緊迫した場の雰囲気を感じて声を殺しているが、そのテンションの高まりは明らかだ。

「この世界について、そしてあなたたちをここに召喚した理由を詳しくお話したいと思います。どうぞそちらにお掛けください」

アリスさんは整然と並んだ横長の椅子に座るよう促す。

橘さんは速攻で椅子に腰掛け、わくわくした様子でアリスさんの説明を待つ。尻込みしていたク

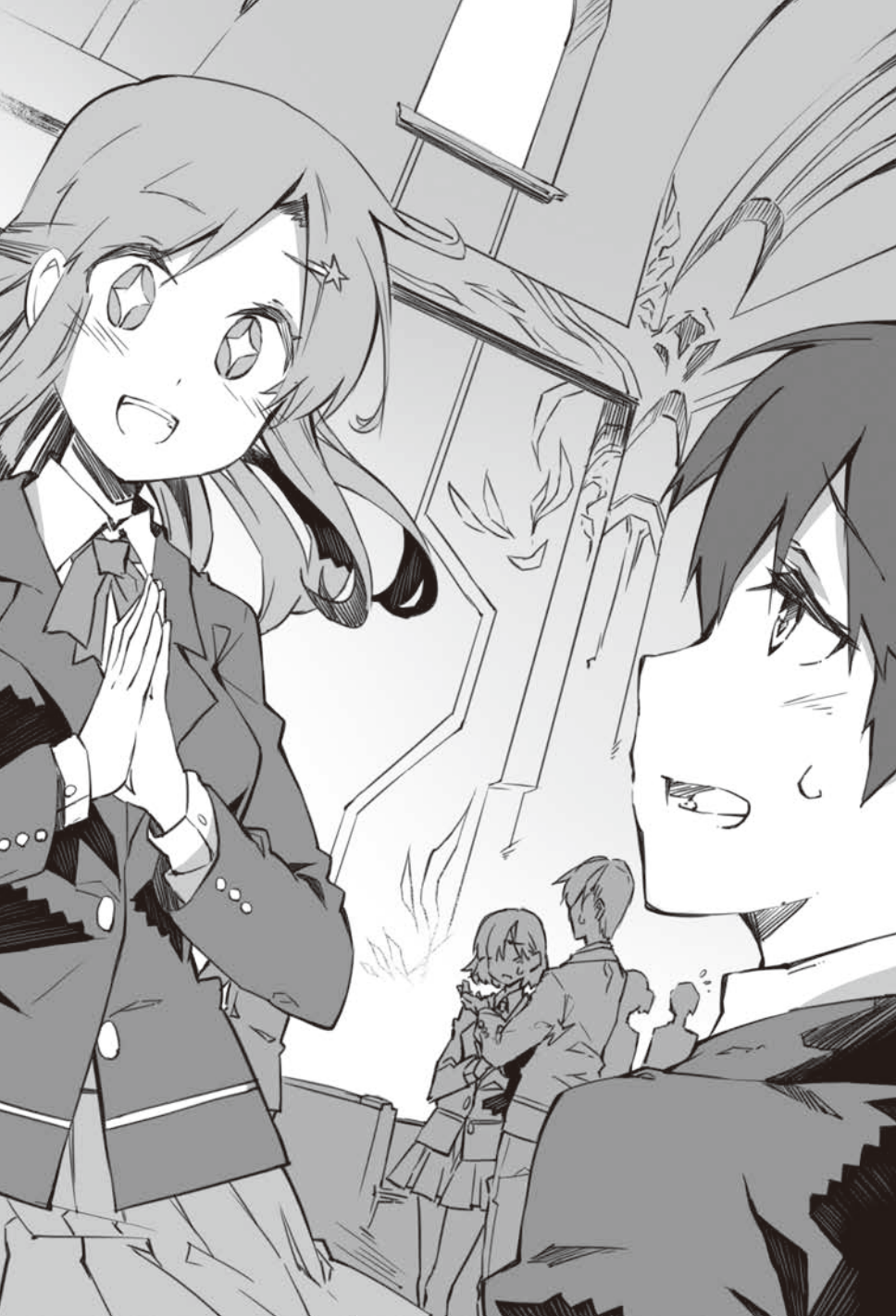
ラスの連中も、その姿を見て渋々椅子に座り始めた。

「ほら杖本君、ここ」

橘さんはポンポンと座面を叩き、自分の隣に座るよう勧めてくる。俺は少し距離を置いて腰掛けた。

そしてアリスさんの説明が始まった。

アリスさんの説明を要約すればこんな感じ。



- ・ここは剣と魔法と魔物が溢れる、俺たちの世界で言うところのファンタジーな世界。
- ・二十年ほど前に魔王が出現し、世界各地の魔物が急増。人々の生活を脅かしている。
- ・魔王は世界各地に地下迷宮を八つ作った。それをすべて攻略すれば魔王が姿を現す。
- ・だが地下迷宮の攻略は難航して一向に進まないため、俺たち異世界人を召喚した。
- ・異世界人の俺たちは、好きな能力を一つ覚醒できるらしい。
- ・その能力を使ってダンジョン攻略を進めてほしいというのがアリスさんの望み。

色々ツツコミたいところではあるが、それをやっていたら話が進まない。

少々時間が経ったお蔭か、皆もだいぶ落ち着いてきたようで、アリスさんの説明を真剣に聞いていた。クラスのおバカさんたちも今は怖いくらい静かなので、逆に心配になるが。

教室からこの場所にワープするという不可思議な現象を目の当たりにして、皆多かれ少なかれこの世界をファンタジーワールドだと認めたらしい。

説明を聞き終わって一番最初に口を開いたのは、やはり委員長の白鳥さんだった。

「どういう理屈か分からないんだけど、地下迷宮を攻略すれば魔王が現れるっていう情報は確かなものなのかしら？」

これはもつともな指摘だ。話を聞いた限りでは都市伝説と変わらない。
するとアリスさんから驚きの一言が放たれた。

「これは魔王本人からの情報なのです」

これにはさすがに、俺を含めた全員がびっくりした。

「魔王からのって……あなたたちは本当にそれを信じてしまったの？ もし畏れたらどうするの」

「いえ、これは確かな情報です。地下迷宮を攻略すれば必ず魔王が姿を現します」

表情は変わらないが、絶対の自信を持っている様子でアリスさんは返す。

だがそれだけでは、うちの委員長を納得させるのには足りない。

「何か……根拠があるなら教えてもらえるかしら？」

「根拠はあります。ですが……お教えできません」

「そんなので信じられるわけじゃないでしょう。ちゃんと全部教えて！」

「……できません」

ため息を吐いて頭を抱える白鳥さん。お疲れ様、委員長。

「まあいいわ。質問を変える。いつ私たちを元の世界に帰してくれるのかしら？」

「今は……できません。魔王を倒していただいてからでないと」

「できませんできませんって、そればっか。まるで中身の無い説明をして、魔王を倒してこいなんて無茶にもほどがあるでしょう。あのね、私たちはまだ学生、子供なの。家族だって元の世界に残してきてる。この世界であなたたちのために命を張って戦う理由なんかどこにもないはずよ」

白鳥さんは鬱陶しそうにポニーテールを払ってから、そう吐き捨てた。

「そ、それは……」

これにはアリスさんも苦い顔をして口を噤むしかなかった。

勝手な都合でこの世界に連れてこられて、魔王を倒してからじゃないと元の世界には帰さないと言われたら、さすがに俺だってちよつとカチンとくる。振り回される側の身にもなって欲しいものだ。

ていうか、白鳥さんの顔がめっちゃ怖い！

こんな訳の分からない現象に見舞われてストレスが溜まつてるんじゃないか、と思ったが――

「だから、皆の意見を聞いてから決めるわ」

「えっ……」

予想外の言葉に、アリスさんは驚きの声を漏らす。

白鳥さんは席を立てアリスさんの横に並ぶと、クラス全員の顔を見回した。

「アリスさんの言うことを信じて、この世界で戦つてもいいと思う人はその場に座つていて。もしそれが嫌な人がいるなら、挙手をして遠慮なく言うこと」

不思議なことに、誰も動こうとしなかった。雰囲気吞まれて言い出し辛いのかと思つたが、どうやらそうではないようだ。

誰一人、嫌そうな顔をしていない。むしろ全員、頬を緩めてわくわくした様子だ。

「美人さんをお願いなら、聞かないわけにはいかないでしょう」

「そうそう。ちよつとした修学旅行みたいなもんだろ？ 学校で勉強してるより楽しいっしょ」

いつもの調子を取り戻したヤンチャ男子たちがお気楽な感じで騒ぎだす。

「魔法とか、すごくない？ 一度見てみたいかも」

「私たちが勇者つて、なんかドキドキするね。可愛いモンスターとかいるのかなあ」

女子たちも楽しそうに話に花を咲かせている。

こいつら全員お気楽だな。ま、俺もそのおバカさんの一員なわけで、この世界にちよつとわくわくしている。魔法に魔物、地下迷宮か。

気づけば、クラス全員が言い知れぬやる気に満ちており、妙な団結力が生まれていた。これが皆と心を一つにするってことなのかあ。

少し間を置いて、クラスの意思を確認した白鳥さんが口を開いた。

「反対の人は誰もいないみたいね。まあ、このとおり私達バカだから頼りないかもしれないけど、それでもよければ勇者として魔王退治に協力させてもらうわ」

かっこいいなあ、委員長。突き放すと思いきやの手の平返し。この台詞はイケメンすぎる。

白鳥さんは、アリスさんに握手を求めて手を差し伸べた。

それを見たアリスさんは瞳を潤ませながら小さく一言。

「……みなさま」

アリスさんはゆつくりと、とても大切そうに白鳥さんの手を取った。

「よろしくお願いします」

アリスさんはそう言つて、人形のように可愛らしい笑顔を俺たちに初めて見せた。

勇者として魔王を倒すことを決めた俺たち二年C組の面々は、続いて能力覚醒の儀式に取り掛かろうとしていた。

儀式と言っても、至ってシンプル。この場所で発現させたい能力を頭の中で強くイメージするだけ。たったそれだけのことで、俺たちは超能力者になれるそう。

「まずはご自身のステータスをご確認ください。頭の中で『ステータス』と念じてみてください」再び無表情に返ったアリスさんの言葉を受け、皆は言われた通りにステータスを確認する。そして湧き上がる男子の歓声。

「うおお、すげえ！　なんか頭に直接きたあー!!」

「俺の筋力20もあるぞおー!!」

皆が盛り上がる姿を見て、俺も自分のステータスが気になり確認してみる。
ステータスつと。

【名前】 ツエモト ユウト

【レベル】 1

【HP】 20 / 20

【MP】 0 / 0

【筋力】 12

【耐久】 7

【敏捷】 10

【魔力】 0

うおおー、すげえー。頭の中に直接情報が送られてくるうー。

思わずおバカ男子たちと同じような反応をして、改めて自分のステータスを見定める。

名前はそのまま、レベルが付いている。若干小柄で帰宅部な俺に相応しいステータス内容だ。

何を基準にしてこの数値になっているかは不明だが、おおよそこれくらいが一般ピーポーの数値だろう。ヤンチャ男子に筋力負けているけど、く、悔しくなんか、ないでござるよ。

それにしても、なんでああいう奴らって、部活にも入っていないのに無駄に筋トレとかするんだろ。ボディービルダーでも目指してんのかな、って思うわ。ま、ぼっちには分からない領域の話だけど。

皆が自分のステータスを確認するのを待って、アリスさんは説明を再開した。

「あなた方はどんな能力でも一つだけ発現可能です。ただし、強すぎる能力には欠点や負荷が生じます。変更も取り消しも不可能なので、くれぐれも慎重にお考えください」

デメリットがあることを知って、皆それぞれどんな能力にするか悩みはじめた。

そのままかれこれ二十分経過。まあ、魔王を倒すための強力な力を選ぶわけだから、それは慎重にならざるを得ない。

そんな中でも、一際険しい表情の人物が俺の隣に座っていた。

「うーん、どんな能力にしようかなあ〜？　やっぱりここは最強系の能力を選ぶべき？　でも、強

すぎるとデメリットとリスクがあるんだよねえ。うーん……難しい！」

頭痛を堪えるかのように頭を抱え、それでいてどこか楽しそうに唸っているのは橘さん。

「そもそもここは、本当に異世界なのかな？　ねえ、どうなんだろう杖本君？」

いや、俺に聞かれても困る。ていうかそもそも、なんで今その疑問に到着したのか謎だ。

「ま、まあ、異世界なんじゃないかなあ。実際ワープしちゃってるわけだし、それにステータスだつて出たし……どう考えても普通じゃないよ」

「うーん、それもそうかあ。でも私のイメージでは、異世界は地球の十倍くらい重力があると思つてたんだけど、全然そんなことないみたいだね」

おいおい、それって少年マンガの世界だよ。俺は愛想笑いでごまかす。

「杖本君はどんな能力にするか決めた？」

「えっ？　俺？」

そうだった、周りばかり見ていて自分の能力を全然考えてなかった。やばい、どうしよう……。ここで俺がクラス内で最強の能力に目覚めて、一気に主人公路線に突入。チート能力で魔王を倒して異世界を華麗に救い出し、美少女たちが俺に惚れてハーレム建国！　その後、俺は異世界で幸せに暮らしましたとさ。めでたしめでたし——っていう流れも悪くない。

ま、それは冗談として。

でもあれ？　俺には何かやらなければならないことが、あったようなあ……なかったようなあ……

俺は何気なくクラスの皆を見渡した。

アリスさんと何かを話す委員長の白鳥さん。楽しそうに話し合うヤンチャ男子たち。真剣な顔で、おそらく能力のことを考えている女子たち。隅っこで固まるオタク集団。

そして視線は、俺の隣にいる橘さんのところで止まった。

そうだよ。俺はここに来る前、友達を作ろうとしていたじゃないか。苦手な騒がしい男子たちとも仲良くなるうと。

目の前にいる唯一の話し相手、橘さんのために。

突然の異世界召喚でうやむやになりそうだったが、今でもその気持ちは変わっていない。

何もしなければこの世界でもぼっちになってしまうからな。それを見た橘さんはきつと、あの時と同じように悲しい顔をするだろう。そうならないためにも、やっぱりこいつらと打ち解けておく必要がある。

なら、能力はどうする？

根拠はないけど、遊び気分で浮かれきっている他の奴らよりは、有能で使い勝手の良い能力を思いつく自信がある。

でもそれで、クラス内で最強になってしまったら、逆に友達にしてもらえないんじゃないか。必要以上に俺が目立ってしまったら、目立ちたがりのヤンチャ男子たちは面白くないだろう。オタクの中野たちの方に転がり込んで結果は一緒だ。あいつらなんだかんだいってもプライドが高いからな。

じゃあどうする？

……答えは決まっている。

最強になつて友達ができないなら……下手に出て友達を作ればいい。

正確に言うならばサブキャラになるんだ。勇者様ご一行の後方に位置しつつ、しっかり端つこのポジションはキープする。アニメのオープニングかエンディングにワンカットだけ映れば上出来。

真つ先に敵にやられたり、主人公の能力を解説したり、時には自爆攻撃を受けたり。そんな引き立て役になればいいんだ。

そうになると、問題はどんな能力にするかだな。そもそも相手にされないような能力は論外だし……

ぶつちぎりの最強能力より、中途半端に使える能力を考える方が難しい。

ならここは、そういうのに詳しい人に相談するのが一番だよな。

「た、橘さん。サブキャラって言ったら、一体どんな能力を思いつく？」

「えっ？ もぶきやら？」

唐突な質問に、橘さんはきょとんと首を傾げたが、理由も聞かずに答えてくれた。

「うーん、そうだなあ……『土を操る能力』とか？」

「おおー、サブキャラっぽい」

予想以上に脇役っぽい能力が登場し、思わず声を上げてしまった。

「あとは……『身体強化の能力』とか『危険を察知して主人公に知らせる能力』つてのもある

かも」

「おおー、地味でいい感じ。脇役を具現化したような能力だね」

「あとは緑色の小人の自爆攻撃で死亡、とかね」

「……あの、最後のは能力じゃなくなってますが。でもまあ、ありがとう。これで覚醒させる能力の見当がついたよ」

「え、そうなの？ あんまり大したこと言っていないと思うけど、役に立てたならよかった」

橘さんはそう言つて、につこり笑顔になった。

そう、役に立つ……主人公の役に立てばいいんだ！ それだけでサブキャラとして成立する。

主人公は活躍して名声を上げ、サポートに回った脇役にもちよつとだけ感謝する。それで地道に親密度を上げて友達関係を結べばいいんだ。

完璧だ。完璧すぎる。

そして俺は、自分史上最大に脳をフル回転させて一つの答えを導き出した。

主人公の役に立ち、かつ誰もやりたがらない地味な役割、それは……

回復薬だ。

間違えた、回復役だ。

あや危うく狩猟中にがぶ飲みされるところだった。

回復役ならどんな戦闘でも十分役に立つし、仮に誰かと能力が被ってしまったても、数が多いに越したことはないからな。

それに、絶対に最強にはなりえない。

なぜなら、攻撃が不可能だから。魔物を倒せないから出しゃばつてしまう心配もないし、傷を癒やす役割なら自然と感謝されて友達も作りやすいはず。我ながら名案だ。これしかない。

「橘さん。俺、能力決めたよ」

「えっ、本当？ それってどんな……」

疑問符を浮かべる橘さんにふつと微笑み、俺は遠くにいるヤンチャ男子たちに視線を向けた。

「まあ見ててよ。友達も作れる素敵^{すてき}な力だから」

そう言つて、俺はヤンチャ男子たちの集まる場所へ歩いていく。

近づく俺に気がついたのか、固まって騒いでいた数人の男子が口を閉ざした。

突然空気が変わつて、他の皆も一斉にこちらに注目した。

しんと静まり返る空間。集中するたぐさんの視線。それは、遅刻して授業中に教室に入った時とどこか似ていた。

俺はあの瞬間のシラけた雰囲気ですこぶる嫌いだつた。もし入ってきたのがヤンチャな男子の誰かだったら大賑わい^{おほにぎわい}だろうが、俺の場合はそれがまったく起きない。まるで、お前に友達なんていないんだと無言で告げられているみたいだつた。

でも今だけはこの沈黙に感謝しよう。お蔭で皆に俺の意思を伝えられるのだから。

俺は緊張を和ら^なげるために大きく息を吸うと、皆に聞こえる声量で宣言した。

「回復役なら俺に任せてくれ」

この時俺は、まったく予想もしていなかった。

後にあんな出来事が起きるなんて。そして、ぼっちがどれだけ罪な存在なのかを。

今さら突つ走つた自分を後悔しても遅い。

結局俺もこいつらと同じで、とんだバカ野郎だつたんだ。

3

「回復役なら俺に任せてくれ。だから、皆は思い通りの強力な力を手に入れるといいよ」

誰も反応する者はいなかったが、俺はその言葉を現実のものにするために、頭の中で強くイメージした。

おそらく、まだこの場の誰もやっていない能力覚醒。

手に入れる力は、皆を癒やす回復の力。

俺のステータスは魔力とMPが0だったから、ここは魔法よりも『癒しの能力』にするべきか？ いや、どうせなら回復魔法にしよう。きつと魔法を手に入れたと同時に魔力とMPが付くに違いはない。イメージした通りの力になるはずだから。

大丈夫、大丈夫。回復魔法、回復魔法、回復魔法……

一心に念じると、突然ぞわつと体の内側に悪寒が走った。

鳥肌が立つ時と似て、少しくすぐつたいが、不思議と嫌な感覚ではない。

それに、体の中心にほのかな温もりを感じる。

これが、魔法……なのか？

俺は早速ステータスを確認した。

【名前】 ツエモト ユウト

【レベル】 1

【HP】 20 / 20 【MP】 12 / 12

【筋力】 12 【耐久】 7 【敏捷】 10

【魔力】 8

スキル…回復魔法「ヒール」

「……よしっ」

ばつちり思い通りの力が手に入ったことを喜びつつ、俺は改めてクラスの皆を見渡した。

当然、俺は皆が微笑んでこちらを見ている風景を想像していたのだが……

あ、あれ？

誰一人として、微笑んでいる者はいなかった。むしろ気まずそうに目を逸らしている人たちが大

勢だ。予想外の光景を目の当たりにして、俺は呆然と立ち尽くす。

すると、ヤンチャ男子の一人が立ち上がって目の前までやってきた。目つきが悪く、ツンツンした金髪が特徴の、中肉中背の男子。遠藤だ。

遠藤は鋭い視線で俺を睨みながら口を開いた。

「それってつまり、俺たちを前で戦わせて、自分は後ろでコソコソ隠れてますってことか？」

「……えっ？」

な、何言ってるんだ、こいつ……

俺は遠藤の言葉の意味が呑み込めず、放心状態を続けていた。

ヤンチャ男子の一人からまた一人立ち上がる。

「回復役になれば戦う必要がないから、魔物に襲われる心配もないし、もし怪我をしても自分で治せるもんな。全部自分のためなんじゃないのかよ」

「なっ!? ち、違う!」

な、なんで、そんなこと……俺はただ、皆と仲良く……

ふと見ると、アリスさんと白鳥さん、それから橘さんの三人は何が起きているのか分からない様子で哑然としてこちらを見つめていた。男子たちは皆、憎しみのこもった目で俺のことを睨んでいて、それ以外の女子は関わりたくないとはかりに目を逸らしている。

一体何が起こってるんだ。卑怯な考えなんてないのに。むしろ皆の役に立とうと思って提案したつもりだ。だけど、なんだこれ？

回復役になろうとしただけでこんな扱いを受けるなんてありえない。ゲームだって回復役がいないと途端に攻略が難しくなる。どちらかと言えば必須のポジションのはずだ。その重要な役目を俺なんかに任せたくはないにしても、こんなひどい言いがかりをつけられる覚えなんてない。

きっと何か理由があるんだろう。俺を突き放す理由が。

でも、それがなんなのかさっぱり分からない。俺はこの人たちのことを何も知らない。

もしも、俺ではなく他の誰かだったら、こんなことにはなっていないんじゃないか。

「俺ら^{おとり}を囷^{おとり}にして逃げる考えか」

「自分だけ安全地帯から高見の見物できるもんな」

違う、そんなことはしない。俺だって皆と戦う！

「楽して勇者の功績を上げようとするとか、最低だな」

「男のくせに戦わないつもりかよ。女に戦わせようつてか？　ありえねえ」

なんで皆、そんなこと言うんだよ……

反論もできずに固まっている俺に対して、遠藤が完全なる拒絶の言葉を口にした。

「回復役なんかいらねえんだよ！　ここから出ていけ！」

真正面から受ける絶対的な敵意。

俺はその圧力に押され、無意識に後ろを向いていた。

視線の先には出口^{おほ}と思しき両開きの大扉。

気がつくと、俺はゆっくり、ゆっくりと歩き出していた。

友達になろうとして歩み寄った者から受ける拒絶。決して得意なタイプではなかったけど仲良くやろうと思っていた。だけどそんな……こんなことって……

下唇を噛み、どうにか喝^{おほ}咽^{おほ}が漏れそうになるのを堪える。

疲れてもいないのにふらつく足を引きずるようにして出口を目指す。

背中に感じる視線には色々な種類があるが、今はそれを判別する余裕すらない。

目頭が熱くなり、瞳に映る光景が歪みだした。

とうとう俺は扉に手を掛ける。

ちようどその時、重苦しい沈黙を破って背後でザツと物音がした。

それは橘さんが一歩踏み出した音だった。

橘さん……

俺は彼女の物言いたげな顔を見て悟った。

たぶん橘さんは、俺を引き留めて助けようとしている。

彼女は教室で一人ぼっちでいる俺をずっと心配していた。こんな状況になれば手を差し伸べようとするだろう。

だけど、橘さんまでこいつらから拒絶されたら？

魔物が闊^{かっ}歩^ぽする危険な異世界で戦えない回復役と二人つきりになったら、危険度は半端じゃない。どうにかしてそれだけは避けなければ。

再び訪れた静寂の中、彼女が口を開きかける。
その瞬間、俺は行動に出た。

ハッキリと否定の意思を込めた目で橘さんを睨む。今動いたら橘さんにも良くない状況になるから、絶対にそれだけはしちやいけないと目で訴えた。

これをどう捉えるかは彼女次第だ。クラスに裏切られた俺が逆恨みして自分のことを睨んだと解釈されるかもしれないが、それならそれでいい。

俺を助けて彼女までクラスから除け者にされる展開を避けられるなら、嫌われたって構わない。今まで橘さんのお蔭で、俺は色々と救われていたから。

友達がいなくてつまらない学校。退屈な授業に憂鬱な休み時間。それらすべてををはね除けて、学校に行く理由を作ってくれた橘さん。その恩返しというわけではないが、感謝している相手をみすみす危険に巻き込むのは絶対に嫌だ。

俺の視線の意味に気づいたのか、彼女は踏み出した足を戻し、ただ心配そうな顔でこちらを窺っていた。

そう、それでいい。俺に付き合ってひどい目に遭う必要なんかないんだ。

それに、ぼっちは一人で十分だ。

その光景を最後に、俺は彼女に背を向けて大扉を押し開けた。

薄暗かった室内に光が射し、吹き抜ける微風が爽やかな草木の匂いを運んでくる。

それらすべてを身に受けて、俺は一步踏み出した。

暗い気持ちでいる時に、この春めいた陽気は身に染みる。

この場で全部吐き出したっていいんだと言われているような気もしたが、今さらそんなことはない。俺は扉をゆっくりと閉めると、振り返ることなくその場を立ち去った。

4

外はまさしく異世界だった。

高層ビルもなければ車も走っていない。

空は高く晴れ渡り、見渡す限り広がる青々とした草原を、心地よい風が吹き抜けていく。

今出てきた建物の周囲には、似たような建物の残骸が少しある程度で、それ以外は見事に草原だけだ。どうやら人里からは離れた場所らしい。

想像通りの光景というか、現実離れしすぎていて先ほどの嫌な出来事をすっかり忘れ去ることが出来た――

「――って、そんなわけあるか!」

あそこまで直球で反発されたのは初めてだし、いきなり全部忘れるってのはかなり難しい。

「橘さん……」

彼女はこれからどうするのだろう?

勇者として皆と一緒に魔王を倒すために奮闘する。それは分かっている。

でも、今さらなぜ俺はあの建物から目を離せないんだろう？
ほんの僅かに期待しているのかもしれない。いつもみたいにあの扉をこっそり開けて、ニコニコしながら橘さんが駆け寄ってくるんじゃないかって。

淡くて愚かな妄想だ。

たとえ来たとしても追い返すつもりなのに、何を期待してるんだろうなあ、俺は。

「はあ、いけない。ここは気持ちを切り替えてポジティブにいこう」

そもそもなんで俺はあんなに拒絶されなきゃいけないかったんだ？

繰り返しになるが、回復役は主役にはなり得ないが必須のポジションだ。遠藤だってゲームくらいやったことあるだろうし、それは十分わかってるはずだ。

その回復役をあんな形で追い出すなんて。自分で言うのもなんだが、貴重な回復役が一人減るばかりか、あれじゃあもう誰も回復役なんてやりたがらなくなってしまうと思うんだけど。

あの態度はもう、理由なんてどうでもいいから端から俺のことが大嫌いで、追い出すためのネタを見つけたから突いてきたって感じた。

俺、前に何か嫌われるようなことやらかしたっけ？

ダメだ。全然思い当たらない。

結局、回復役じゃなくて俺のことがいらなかった、ということだ。

「ま、あそこまで嫌われてるんなら、思い残すことなんか何もありませんよ。いつそ、拒絶されて清々しい」

そう呟いてみたものの、変な名残惜しさに一瞬気持ちが暗くなる。

だが、ぶるぶると首を振ってその気持ちを吹き飛ばし、今度こそ皆の集まる建物に背を向けた。

「さて、これからどうしようかなあ」

勇者としての使命から解放され、クラスの皆とも関係が切れた今、俺を縛るものは何もない。

日本に戻ったところで待っている友達もいないし、両親は俺のことを、金を置いておけば勝手に飯を食う生き物、とは思っていない。

無理して一人で帰ろうとしなくてもいいだろう。

今俺は自由なんだ。これからの道を自分で決められるフリーピーポーなのだ。

あれ？『自由な人』ってフリーパーソンだっけ？

いやいや、そんなことどうでもいい。とにかく今はこれからどうするか考えるんだ。

異世界に放り出されたら、まずどんなことをするべきなんだ？

ラノベを読むといっても俺は異世界物の小説はあんまり読んでなかったから、どうしたらいいか分らない。

いや……待て待て。その手の小説にめっぽう詳しい人がいたじゃないか。

お昼休みに図書室でオタクトークを繰り広げてる時、橘さんはしょっちゅう異世界物の小説の話をしてくれてたじゃないか。

えーと、なんて言ってたっけ？ 異世界に迷い込んだ主人公が最初にするお約束の行動って。

その時、さながら迷える子羊を救う女神の一声のように、橘さんの声が脳内再生された。

『異世界に迷い込んだ主人公はね、まず最初に冒険者ギルドに行くんだよ!』

おおー、それだ! 橘さんは確かにそう言っていた。

お導きに感謝です。アーメン。

「冒険者ギルド……かあ……」

いつまでも突っ立っていても仕方がない。俺は地平線まで広がる草原を歩き出した。

これから自分一人だけでこの世界を歩んでいかなきゃならないと考えると、心地よい緊張感が込み上げてきた。まあ、一人なのは慣れっこだし、大丈夫だろう。

それにこういう展開にちょっと憧れを抱いていた。孤高の戦士が仲間と離れ、一人苦難の日々を過ごす、みたいな。

おっと、あいつら仲間じゃなかった。俺の本当の仲間は橘さんだけだ。この世界での道を示してくれたあの美少女に、やっぱりアーメンだな。

サンキュー、マイエンジェル。愛しています。

俺は最後に心の中で橘さんにお礼を言い、建物から離れていった。

愛加梨

あれ? 今、杖本君の声が聞こえたような気がする。

私は気になって出口の大扉に目を向けた。

もちろん、そこには誰もいない。

でも今、確かに杖本君の何かを感じ取った。きっと彼は助けを求めているんだ。

私は杖本君を追い出した中心人物に問い質した。

「遠藤君……なんで杖本君を追い出したりしたの!？」

静まり返っていた建物内に、私の声が響き渡る。

主犯の遠藤君はじくりとしてこちらを向き、申し訳なさそうに口を開いた。

「いや……だって……あいつが悪いんだよ」

「どこが!? 杖本君は何も悪いことしてないよ!？」

「そ、それは……」

私はクラスの皆を見渡しながら続けた。

「皆も皆だよ! なんで杖本君が追い出されそうになっている時に止めようとしなかったの!? なんで黙って見て見ぬふりをしてたの!？」

私は、半ば叫ぶように言い放った自分の台詞に、胸がチクリと痛んだ。

私だって同じだったから。

皆に悪く言われていた杖本君を、助けてあげられなかった。

最初は何が起きているのか分からなかったけど、なんとなく状況が掴めてきてやっと一步を踏み出した。だけど、杖本君の目を見たら、結局、私は何もできなかった。

だからこの叫びは、私自身に向けて放っているのかもしれない。